

バイト探しに
この一冊!!

アルバイトをつけるパーマガジン

FROM A

毎週発行 定価200円 (本体価格190円)

神戸大学ニュースネット

NEWS NET

©神戸大学ニュースネット委員会 ホームページhttp://www.kobe-u.ac.jp/newsnet/
関西学生報道連盟共同編集室 〒532 大阪市淀川区西中島3-21-9 駅前ビル502号 06(307)1315

1998
1
1998年(平成10年)
1月号

学生課

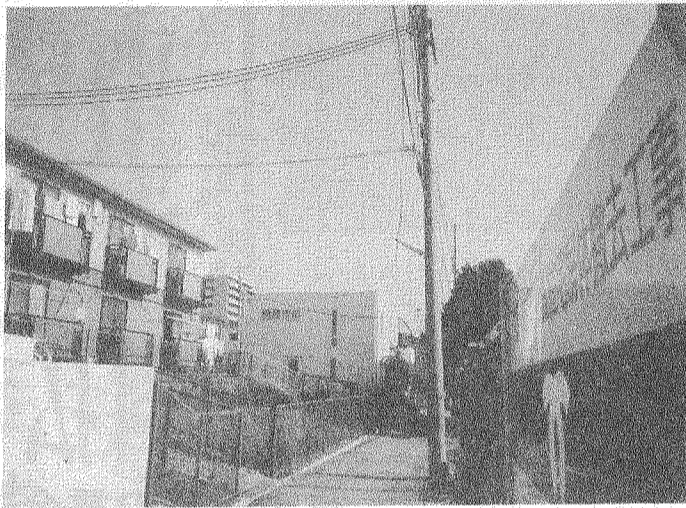
16団体連名で「対話」求めるメール返送

サークルのHP閉鎖を通知

神戸大のホームページ(H.P)上の「学生活動のページ」が、大学側の方針で一月中にも閉鎖され、大学HPから二十九のサークルHPへのリンク(接続)停止、十団体がサーバー移転、などの影響が出る。大学側の方針に反対し、十二月二十五日早朝、十六のサークルが連名で学生課に「お願いの電子メールを送った。これだけ多くのサークルが共同で要望書を出すのは最近では例がない。」と訴えた。学生課は「電子メールの取材に対し、「学生活動のページ」を学生が自主的に運営する組織づくりを、一月十日に行われる文化総部などのリーダーズトレーニングで提案する可能性もあることを示唆している。双方の対話の兆しもあるが、まだ事態は流動的だ。大学側の方針は、昨年九月に神戸大のHPが公式化されたことに伴って、十一月十七日、HPを運営するサークルに電子メールで通知された。各団体からは、納得の行く説明を求める声があり、実際に数団体が学生課に要望メールを送信するなどしたが、いずれにも返事はなかった。(十面に関連記事、ニュースネットhttp://www.kobe-u.ac.jp/newsnet/16誌載)

惨禍…阪神大震災から三年

十七日は入試 慰霊碑は入構可能に



焼けた西尾荘跡(左)。斜め向かいの仮設住宅は撤去工事が終わっていた(98年1月3日撮影)

六甲、御影、住吉…。下宿街には、新しい住宅が建ち、わずかに残るさら地が震災の記憶を呼び起こす。神戸大学が学生、教職員四十四人をほぼ一瞬にして失った阪神大震災から三年がたつ。学生の死者だけが、遺族や関係者は学内に

記憶をとどめる光景も少なく

でも、神戸大、甲南大、関学などで計百一人。一月十七日という日は、戦時下を除き、我が国の大学史上おそらく最も多くの犠牲者がたつた。十七日はセンター試験だが、遺族や関係者は学内に

三商戦 V16達成

神戸大、大市大、一橋大の旧制商科大学の間で毎年行われる「第37回三商学体

競技種目	1位	2位	3位
スキ	神戸大	大市大	一橋大
馬術	大市大	神戸大	一橋大
クロスカントリ	一橋大	大市大	神戸大
ラグビー	大市大	一橋大	神戸大
ホッケー	一橋大	大市大	神戸大
ボート	一橋大	神戸大	大市大
準硬式野球	神戸大	大市大	一橋大
ハンドボール	神戸大	一橋大	大市大
ソフトテニス	神戸大	一橋大	大市大
バスケット	神戸大	大市大	一橋大
陸上	神戸大	大市大	一橋大
競技ダンス	一橋大	神戸大	大市大
体操	神戸大	大市大	一橋大
弓道	神戸大	大市大	一橋大
卓球	神戸大	大市大	一橋大
水泳	神戸大	大市大	一橋大
サイクリング	神戸大	一橋大	大市大
サッカー	神戸大	一橋大	大市大
ゴルフ	神戸大	大市大	一橋大
硬式野球	大市大	神戸大	一橋大
空手道	大市大	一橋大	神戸大
剣道	神戸大	一橋大	大市大
バレーボール	大市大	神戸大	一橋大
柔道	神戸大	一橋大	大市大
弓	神戸大	一橋大	大市大
バドミントン	神戸大	一橋大	大市大
硬式庭球	神戸大	大市大	一橋大
気道	神戸大	大市大	一橋大
合同練習	神戸大	大市大	一橋大

育大会(旧三商戦)で神戸大が十六回連続二十九回目を総合優勝を果たした。

六甲台のパソコンにウィルスが侵入

六甲台情報処理教室と電算機室に設置されているパソコンの中にウィルスが侵入していることが十二月十二日わかった。

感染していたのは、「ウィンドウズNT」の中にあるソフト「マイクログワード」。関係者の話では十六日には駆除が終わり、これによる大きな被害はなかったが、ディスクの検査用パソコンを用意するなど対応に追われた。

アイスホッケー1部昇格 関西学生リーグ 創部10年目で初



関西学生アイスホッケーリーグの入れ替え戦が十一月十八日高槻スケートリンクで行われ、2部2位の神戸大が1部7位の阪大に競り勝ち、創部10年目で初の1部昇格を果たした。

神戸大は2部レギュラーリーグを四勝二敗一分の三位で折り返した。そして上位チームによるプレーオフで一勝二分の二位につけ、入れ替え戦出場を決めた。

鈴木健志主将は「筋トレ、陸トレなど練習量が増えたこと、一回生から四回生までまとまれたことが勝因。次の目標はインカレ出場です」と語った。

伏流水

「何が起きても変じゃない、そんな時代さ、覚悟はできてる」ミズチのヒット曲(es)の一節▼阪神大震災もそんな時代に起きた。突如現れた非常の世界。「生来の楽道家だった私でさえ、今を生きていくことで精一杯だった」と法学部の五百旗頭教授▼自然のなす業だけに、「覚悟」はしようがないのかもしれない。「震災の教訓」といっても、全く同じものがおこるわけではない▼と応援団前副団長の中村さん▼当時を伝えるのも難しい。「おしつけがましく思われるとつらい」と総合ボランティアセンターの稲村さん。経験していない人に伝えるのは容易でない▼しかし経験した人には共通した意見がある。「人のつながりを確認する大切さ」だ。震災から三年。直接経験した先輩は、この春でおかたこの大学から離れてしまう。

神戸大学 サークル総覧'98

ニュースネット委員会では、四月にホームページ及び本紙に「神戸大学サークル総覧」を掲載します。公認団体、同好会を問いません。詳しくは、堀江悟078-1882178、55またはポスター、ホームページを!

神戸大学ニュースネット委員会

発達科学部でもコンピューター不正侵入

十二月上旬、発達科学部コンピューターネットワークにもクラッカーが侵入した事件について、一月五日、同学部情報システム委員会の青木務委員長は「どこまで被害がでているか調査している段階です」と話した。

NEWS NET
新月 Tribune
K.C.Press
神戸女学院大学

後輩たちに伝えたいこと

阪神大震災から三年。大学は大きな転機を迎える。震災を体験した四年生が卒業を迎え、大学生として被災した「世代」がいなくなるから。突き上げるような激震を体で感じ、がれきの町を友を探してさまよい、水を汲み、避難所で暮らし、ボランティアに打ち込んだ「世代」のほとんどが、この神戸大学から巣立っていく。

震災直後の日々から、先輩たちは何を学んだのか。卒業を前にした四年生や、大学院生、OB、教官に、「いま、後輩たちに伝えたいこと」を聞く。（「神戸大ニュースネット」「関学新月トビユーン」「神女院大K.C.Press」の三紙の共同企画です。ホームページ：<http://www.kobe-u.ac.jp/newsnet/>に詳細を掲載します）



中村治さんら神戸大生3人が亡くなった灘区六甲町の西尾荘（95年3月18日撮影）

炎上する西尾荘。友を助けられなかった…

「あの日のできごとを、ずっと覚えていて欲しい」

井口克己さん（朝日新聞社勤務）

炎につつまれていく西尾荘は、一生忘れられない光景だろう。

当時、経営学部三年生だった井口克己さん（24）現・朝日新聞東京本社厚生部勤務）は、親友の中村治さん（当時、経営・三年）を亡くした。

二人は同じ映画研究部に所属していて、同じ名古屋の高校出身。「僕は（灘区）烏帽子町で、中村は六甲町にある西尾荘に住んでいてお互い近かったこともあり、すぐ親しくなりました。

た」という。

震災前日の十六日、井口さんはJR六甲道駅で中村さんを見かけた。バイトに行くために駅にいたんだらうと井口さんは言う。「このときは、また夜に下宿に行けばいいかと思いをかけることはしなかったんです」。その日の夜、井口さんは電話をしたが、中村さんは飲みに行っていて、この日は会えなかつたという。

そして、あの日。「大きく揺れました。揺れが収

まったので外にでると、家の向かいの木造の家の一階はほぼ全滅で、近くの烏帽子中学は火事でした。とりあえず暗かったので明るくなるまで待って、午前七時ごろ名古屋の実家に電話で元氣だと伝えました」。

午前八時ごろ、中村さんの下宿、西尾荘に行つた。「もうどこかに逃げ出したと思つていたんですが、大

家さんが「中村君はまだ中にいる」と言つたのであわてて向かいました。そこで見たのは、手だけがでてい

る」と言つたのであわてて向かいました。そこで見たのは、手だけがでてい

る中村の姿でした。体の上にはコンクリートの床、頭にはスキーに行くからと言つて、貸したばかりのスキー板がのしかかり全く動かない。僕はしがらむしやらに中村の上にあるものをどけにかかったがいっこうに持ちあかない。そこに年輩のおじさんがシャベルを持って現れ、手際よく作業を進めたんです。この時僕は、「よかつた中村を助けられ

る」とよろこびました。「ノコギリを使って梁などを切りのぞき、ほぼなくな

り、ノコギリを使って梁などを切りのぞき、ほぼなくな

り、ノコギリを使って梁などを切りのぞき、ほぼなくな

ろうとしていたとき、外から「火のまわりが速い、早く出てこい」という声がした。「確かに火は迫つてい

るがもう引っぱり出せると思いました。でも、僕のスキー板が邪魔して動かないんです。もう間に合わないと思ひました。僕はもつとも敬愛すべき友、中村を助けられませんでした」。

外に出た井口さんたちが振り返ると、西尾荘は炎と轟音とともに二階部分が崩れ落ちていった。「目の前で見殺しにしてしまった。

目の前で見殺しにしてしまった。



ヘリ中継の画面には、燃える六甲町が映し出された。炎のあたりが西尾荘（NHKテレビより）

こんなに悔しいことは今までではじめてでした。信じられなかつた。「何で消防はやくこないんだ」「神様はいないのか」「何でよりによって一番死なせてはいけない人がこんなところ

で死ななければならぬのか」と思いました。でも、もう中村は、帰ってこないんです」。

翌十八日、名古屋から駆けつけた中村さんのお父さんと、西尾荘の焼け跡を

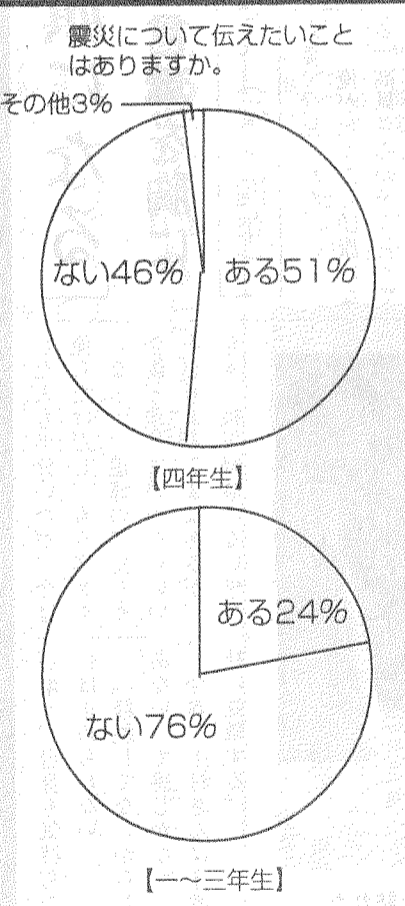
掘った。ほとんど骨だけになった、中村さんのなきがらがみつかった。

「今となつてはもつとどうまく（救出を）できたのではないかと思う。なんだか悲しいというより悔しかった」。あれから毎日、西尾荘に行き、理由もなくただ立ちすくんでいたという。

「（震災を）経験してない人にとっては分からないと思う。それはしょうがない。でも、そういうことがあつたということは覚えていて欲しい。これからもずっと一月十七日は来るけど、何年も経つたからといって「今更」とは言つて欲しい」と語る。

社会人になつてから二年。井口さんは、その後も半年に一回は神戸を訪れる。今度の一月十七日も神戸に行く予定だという。

神戸大・関学・神女院大 3大学アンケート調査



「震災」伝える意識にギャップ

被災した四年生と他学年

「阪神大震災について後輩に伝える意識にギャップがある」とアンケート調査の結果が明らかになった。被災した四年生と他学年の意識の差が浮き彫りになった。

「神戸大震災について後輩に伝える意識にギャップがある」とアンケート調査の結果が明らかになった。被災した四年生と他学年の意識の差が浮き彫りになった。

「震災について後輩に伝えたいことは？」という問いに、当時大学一年生だった四年生が今卒業する計三百五十二人に、九七年十二月下旬に聞き取り調査した。関西学生報道連盟加盟大学の協力で結果をまとめた。

「震災について後輩に伝えたいことは？」という問いに、当時大学一年生だった四年生が今卒業する計三百五十二人に、九七年十二月下旬に聞き取り調査した。関西学生報道連盟加盟大学の協力で結果をまとめた。

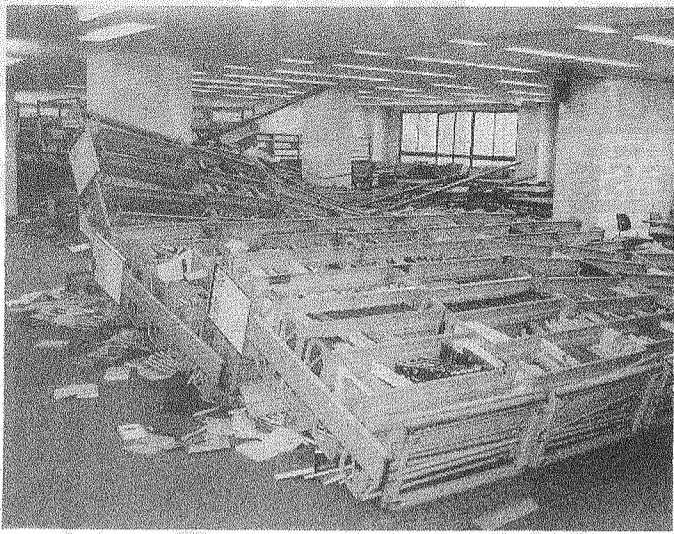
た四年生で「ある」と答えたのは五十一％。これに対して、一～三年生で「ある」と答えたのは二十四％だった。

ただ、一～三年生の中にも被災地（神戸市、西宮市、その他の阪神地区）の高校生だった学生が三分の一を占め、そのうち「ある」と答えたのは五十三％と震災体験世代の四年生とほぼ同じ数字となった。

安否確認に追われた日々

「語り継ぐことを大切に」

神木哲男さん（副学長）



国際文化学部図書室の開架閲覧室（95年1月17日 附属図書館提供）

神木哲男副学長は、震災当時は経済学部長として、教職員や学生の安否の確認や、授業の再開に奔走した。

灘区長峰台にある神木さんの自宅は半壊した。「下の方から煙が見えた」という神木さんは、一月十七日、歩いて大学へ向かった。八時には到着していたという。「大学では地震対策は何もしていなかったからね。とにかく一日目は正確に覚えていないほど夢中でした」と当時の状況を語った。

「情報があつたから入ってきただけで、安否が分かったのは十日以上後になりました」と当時の苦労を語る。

一月二十日が経済学部の卒論の締め切りだった。「通常は締め切りは厳密なのですが、使用していたフロッピーがだめになってしまった人などがいたので、締め切りを延ばすという特別措置を取りました」と苦笑する。

「特に印象に残っているのは、学生間で温度差があったことです」と神木さんは強調する。「神戸の学生がボランティアなどに走り回る一方で、少し離れた所では家でテレビを見ていた学生がいたことも事実です。テストがレポートに変わって喜んだ人

もいたでしょうね」と言う。その温度差を少しでもなくすため、四月から経済学部では震災講座を開講。神戸新聞社などから講師を招き、学生の認識を深めた。

「今日は復興に近づけたらどうか」と思いながら眠る毎日でした」という神木さん。

「震災で大きな痛手を受けたが、学生の中からボランティアが生まれ、いろんな

な人に助けてもらった。三年間で様々なことを乗り越えた、神戸大としても新しいスタートを切ることができた。

「俺が死んだら団旗になる」

高見秀樹さんが亡くなった盛華園アパート（95年3月21日撮影）

中村治人さん（営・四年）

「俺が死んだら団旗になる」高見さんがそう言ったのを覚えている。当時、三年生の団長は近寄りたがった。俺は強かったんだ。俺には言えない。去年副団長を務めた中村さんは橙色の団旗を見ると高見さんを出す。震災の翌年の三月には、六甲台に慰霊碑が建立された。しかし今ではその存在すら知らない学生が増えていく。「去年なら直接体験

た姿で発見された。俺が死んだら団旗になる。高見さんがそう言ったのを覚えている。当時、三年生の団長は近寄りたがった。俺は強かったんだ。俺には言えない。去年副団長を務めた中村さんは橙色の団旗を見ると高見さんを出す。震災の翌年の三月には、六甲台に慰霊碑が建立された。しかし今ではその存在すら知らない学生が増えていく。「去年なら直接体験

「震災で忘れられないできごととは？」

四年生に聞く

- ・頭から血を流しながら歩いてる人や、道路に毛布にくるまって座っている人といった、非日常的光景。
- ・つづれたアパートの前で、先輩の足が冷たくなっているのが発見され、その後、ご両親がかけつけられて、泣きながら「ありがと」と一人一人の手を握ってまわられたこと。
- ・落下したJR六甲道駅の前でカップルが写真を撮っていた。
- ・火災現場で何もできなかった。
- ・部屋に閉じ込められて、出られなかったこと。
- ・なぜか過食症に近い状態になってしまったこと。
- ・家族が家の下敷きになってヒステリックになっている女の人の見たこと。
- ・連絡のとれない友達や安否が確認できなかったため、テレビで死亡者の名前を見るのがとても恐かった。
- ・十二時間かけて広島に帰ったこと。
- ・水、ガスがでたこと。
- ・「助けてくれ」という叫び声。
- ・部屋からやっこのことを出した時に、吐き気がして、気分が悪くなり、誰でもいいから人に会いたいと思ったこと。
- ・「神戸大ニューズネット」、「関学新月トリビューン」、「神女院大K.C.Press」の、三大学の四年生、百四十二人への聞き取り共同調査から

友を、教え子を止くして

「俺が死んだら団旗になる」

応援団長の言葉を胸に

中村治人さん（営・四年）



97年1月17日、中村さんは慰霊碑を訪れた

学生・教職員 亡くなった44人

- | | |
|---|--|
| <p>法学部(6人)</p> <p>工藤 純
櫻井英二
森 涉
廣瀬由香
加藤貴光
二宮健太郎</p> | <p>理学部(5人)</p> <p>齒原 孝
梶 達雄
篠塚 真
高橋幹弥
沈 一春</p> |
| <p>経済学部(5人)</p> <p>高見秀樹
後藤大輔
林 宏典
金山朋子
白木健介</p> | <p>工学部(10人)</p> <p>今 英人
競 基弘
榊富浩二
清水倫行
坂本竜一
神徳史朗
鈴木伸弘
長尾信二
母 志斌
溥 建鴻</p> |
| <p>経営学部(4人)</p> <p>藤原信宏
中村公治
戸梶道夫
呉・ショウ</p> | <p>農学部(2人)</p> <p>細井里美
曹・セン</p> |
| <p>国際文化学部(2人)</p> <p>キン・テイ・スエ
ウエイ・モウ・ルイン</p> | <p>医学部(2人)</p> <p>稲井健太郎
橋本健吾</p> |
| <p>教育学部・発達科学部(3人)</p> <p>磯部純子
上野志乃
川村陽子</p> | <p>教職員(3人)</p> <p>松田和久
朝倉純子
中條聖子</p> |
| <p>▽敬称略</p> | <p>生協職員(2人)</p> <p>茶本潔代子
國澤美輪</p> |

ゼミ生を失った悲しみ

「一日一日を大切にしたい」

五百旗頭眞さん(法学部教授)

「彼は格別に真剣に私に向かってくれましたね。彼には(当時)ガールフレンドがいたんですが、ゼミで僕が彼を評価したら、それこそ天にも上る気持ちでその彼女に報告したって言うてましたよ(笑)」。

法学部の五百旗頭眞教授(日本政治史専攻)は、大切なゼミ生を震災で亡くした。卒業論文で大論文を書くことと意気込んでいた最中に召天した森渉さん(当時法・四年)。クリスマスチャンだつた彼のひたむきな姿を、教授は鮮明に心に抱いている。また森さんのことを批評したら、「もう一度そのことについて彼女と議論しあつて、僕にぶつつかってきたんですね。がんばつて」

軽音楽部に所属していた森さんは前の晩に友人の家で飲んでいたら、泊まらず下宿先に帰りが、北側にあるベッドで寝ていた。南側にこたつがあり、そこで彼は勉強していたが、卒論と最後の試験に備え、風邪をひいてはいけなさと大事をとつたのだという。しかし皮肉にもそのベッドの方へ梁は直撃した。

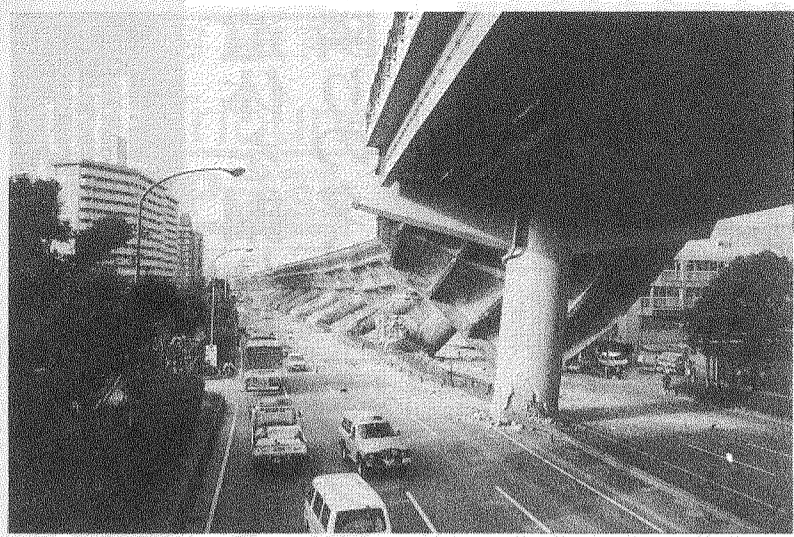
「三年で(震災での)特例措置が切れるケースが多い。見えないところで今後一層しんどくなる人も出るやろうし、今まで先送りされてきた問題がさらに追い打ちをかけてくるやろうね」。ボランティアを通して、被災住民の気持ちが痛いほど身にしみています稲村さんだけに、思いは複雑。「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

ね。年下のゼミ生にも彼の本をすすめていました」。毎年ゼミで発行する小冊子「真実の道」は、九五年の春の号は森さんの追悼号となった。そこには「森さんへ」と題して、教授や当時の三、四年生による手記が綴られている。ある後輩はその中で彼に対してこう振り返っている。「まず外

見からいえば、いつも少し太めのストリートパンツに、布の肩さげかばん。全体的に少したぶつとした服が、お好きなようだった。語り口は、独特で、人なつこくゆつくりとしていて、いつも関西弁」。彼の人間味がよくわかる。「ところが、森先輩はすごい人だつた。発言する時は誰しも考

え考え、少しは力が入る者なのに、先輩のかたにはいつている力はゼロ(？)。先輩独自の考え方は、かなりの量の知識と長年培われた深い思考によって裏づけされているのが感じられた」。

五百旗頭教授は自身を楽家と呼んでいるが、そんな彼もあの日以来、一日一日を大切にしたいという気持ちで芽生えた。「将来のために力を温存しておこうとしても、そんな保証できないですね。今何か持っているものは出すべきですよ。人生の中で決勝戦つて、ないかも知れん。学生も、そして私もそれを肝に銘じて生きていきたい」。



倒壊した阪神高速(東灘区深江本町で。95年1月17日午前9時30分撮影)

ボランティアを通して

被災地の痛みを心寄せる

「次に生かせるものはないか」

稲村和美さん(院・二年)

震災救援隊とともに学生の震災ボランティアの中心となつてきた総合ボランティアセンター。今も、被災住民へのボランティアはもちろん、高齢者介護やあしなが遺児への支援活動も一層積極的に行っている。しかし「活動的にそろそろ総括・検証といった時期」と元代表の稲村和美さん(院・二年・法学部専攻・法社会学専攻)。

「三年で(震災での)特例措置が切れるケースが多い。見えないところで今後一層しんどくなる人も出るやろうし、今まで先送りされてきた問題がさらに追い打ちをかけてくるやろうね」。ボランティアを通して、被災住民の気持ちが痛いほど身にしみています稲村さんだけに、思いは複雑。「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

をいかに私たちの問題としてとらえるかがボランティアを考える意義。ボランティアのやりすぎがかえって自立を阻害するということ、自立できない人にはそれなりの理由があるはず。そうした阻害要因を取り除く活動が必要なのには」。震災を機に総合ボランティアセンターに入った稲村さんは当時法学部三年生。「あれ以来学ぶことは数知れず。あの日がなければ院にも行かなかつた」。

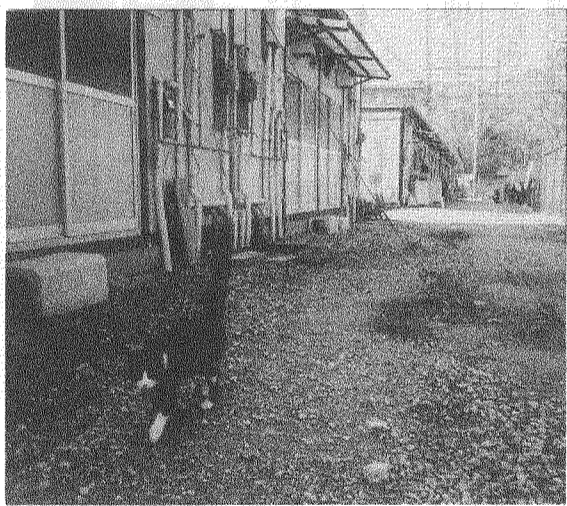
しかし、次第に震災の色が薄れていることは稲村さんも認めざるを得ない。「今、当時を体験してない学生に無理に関心を持つていうのは不可能。でもせつかく四年間でも神戸にいるのだから、被災地の情報には関心は持つてほしい」。

「三日目からようやく友人のおばあさんの家へ移ることができたんです。それからずっとボランティア活動

ただ、その時は結局あきらめてその場を立ち去つた。次にそこを通りかかつて見ると花が供えてあつて、ああ亡くなったんだな。でも震災後何日も経つてから発見されて、それでも生きていた人がたくさんいたって言うことを知ると、どうしてあの時簡単にあきらめてしまったのか、あの時の自分には助けがなかったのか、あんなに後悔や無念さはないのか、そう思うと悔しくて仕方ない。この後悔や無念さが、活動を続

馬場孝輔さんは、震災当時大学一年生だった。西宮市門戸荘の自宅で被災。「かなりの揺れで体が壁から壁に飛ばされた。起きてすぐマッチを付けようとしたんですが、(手が震えて)つけられなかったんです。そこで初めて自分がこわがっているということに気がつきました」と。「一時間程かかりマンションから出ると、外付けの非常階段は倒れ、新幹線の陸橋が落ちたり、辺りでは煙りがあがっていてすさまじい状況でした」。マンションを出て、返事がない家を助けたり、親は食料と住む所の確保など、一日目は時間が過ぎるのが早かつたという。

地震の二日前の成人式で再会した同級生が、テレビの死者欄の名前にでていた。知人が五人亡くなった。「死ぬときは死ぬ、これだけは震災で分かりました」と語る馬場さん。この春からは農学部の大学院に進学する予定だ。



38世帯のうち、半数は空室だ。むこうは工学部。(灘区一王山仮設住宅 98年1月3日)

全国から来た救援

地元との「ギャップ」なぜ

馬場孝輔(農・四年)

馬場孝輔さんは、震災当時大学一年生だった。西宮市門戸荘の自宅で被災。「かなりの揺れで体が壁から壁に飛ばされた。起きてすぐマッチを付けようとしたんですが、(手が震えて)つけられなかったんです。そこで初めて自分がこわがっているということに気がつきました」と。「一時間程かかりマンションから出ると、外付けの非常階段は倒れ、新幹線の陸橋が落ちたり、辺りでは煙りがあがっていてすさまじい状況でした」。マンションを出て、返事がない家を助けたり、親は食料と住む所の確保など、一日目は時間が過ぎるのが早かつたという。

「三日目からようやく友人のおばあさんの家へ移ることができたんです。それからずっとボランティア活動

ただ、その時は結局あきらめてその場を立ち去つた。次にそこを通りかかつて見ると花が供えてあつて、ああ亡くなったんだな。でも震災後何日も経つてから発見されて、それでも生きていた人がたくさんいたって言うことを知ると、どうしてあの時簡単にあきらめてしまったのか、あの時の自分には助けがなかったのか、あんなに後悔や無念さはないのか、そう思うと悔しくて仕方ない。この後悔や無念さが、活動を続

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「救出できなかった悔しさバネ」

講義とボランティア両立の日々

星野裕志さん(経営学部助教)

神戸大の星野裕志助教(当時助教、国際物流、国際経営環境専攻)は、自宅のある神戸市東灘区住吉東町で震災に遭い、以来ずっとボランティア活動を続けている。「東灘区では震災で九十三%の家屋が倒壊して、とにかくみんなが

傷ついていた。つまり他人事じゃない、自分もそうなっている可能性だつてあつたわけだから。だからボランティアとか、そういうことじゃない」星野助教はこう振り返る。

震災から三年が経とうとする今も活動を続ける動機

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

「被災した人たちにもいろんなニーズがあつて、それ

地域のつながり大切に

遺体を掘り起こしてくれたのは 隣りのクリーニング屋さんだった

庄子猛さん（済・五年）

「二階が落ちて一階に落ちていました。ほんと全壊というかんじで。なんか変わり過ぎていて事態がのりこめなかった。下宿に何度か行ったこともあり、知っていた分なおさらそうでした。彼の遺体はもうその時見つ

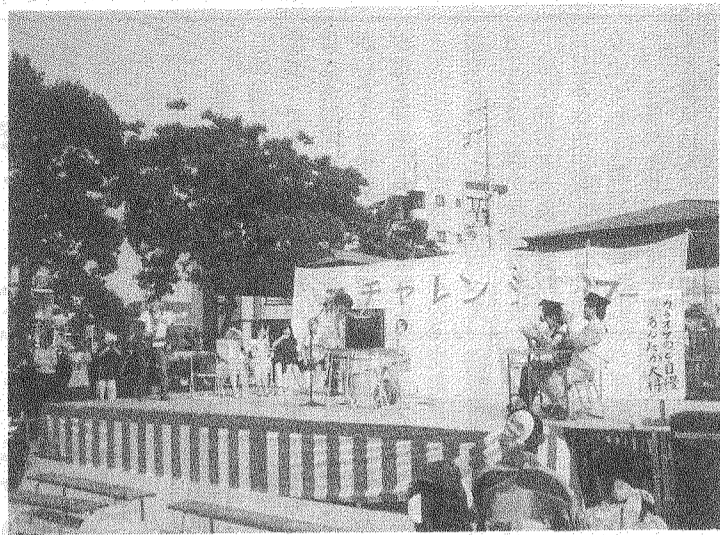
「一月十七日はとりあえずLANへ行きました。みんなの安否を確認したかったこともあるし、何より僕の家が倒壊してしまっていたから」。午後二時ごろのLANには千人くらいの人が見え、あわてて駆けつけた。庄子さんは今でも月に一度手を合わせに、林さんの

られたのはリングがたつたの百個だけ。それで僕たちが何かしなければ、ということになって炊き出しをしていました。そこから「救援隊」が生まれたんでしょね」。しばらくたって、林さんの下宿の辺りから煙が立っているのが見え、あわてて駆けつけた。庄子さんは今でも月に一度手を合わせに、林さんの

下宿のあった場所に行く。林さんの遺体を掘り出したのは、隣のクリーニング屋さんだった。区役所から届いたのは、たった百個のリングだった。「行政が行う救援活動はあてにならない。頼りになったのは、地域のつながりや友人関係。そうした関係を大切にしなければ、いざと言うときに困ると思う」。

震災を機にイベント 原点は学生と地域の交流

松本邦裕さん（経済卒）



灘チャレンジ'97が行われた都賀川公園には約五千人の人が集まった（97年6月1日 撮影）

総合ボランティアセンターとともに学生の震災復興ボランティアの旗手となった「神戸大学学生救援隊」。震災を機に企画されたイベント「灘チャレンジ」は今でも毎年六月に行われ、学生と地域住民との交流の場として毎年恒例の行事となっている。

「何かをしようと一生懸命になつてくるとは、少人数。神戸にいつまでも金を送ることがいいことではない。アカデミックな人なら今後どうすればいいかを真剣に考えるべきだ」と救援隊名誉事務局長補佐の松本邦裕さん（当時院・二年）は語る。

事実を、記録を残す

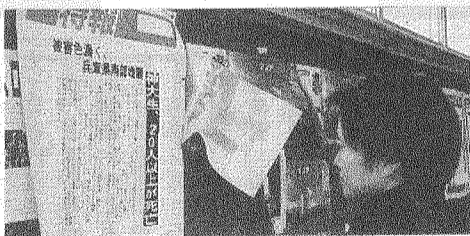
倒壊、避難、炎上… ありのままの写真 ホームページに

乾秀之さん（院・博士二年）

「しばらく揺れが続く取まっから辺りを見渡しました。妙に静かできれいな月が出ていたのを覚えてます」。震災当時、自然科学研究科修士課程一年で遺伝子工学を

研究していた乾秀之さん（現・博士課程二年）は灘区篠原南町の木造二階建てのアパートに住んでいた。「六甲小学校に向かう途中にも歩いていられない程の揺れが何度となく襲い、

か。運命はわからない。でも、どうやって生き残るかとか、困った時の対処などは学びました」。街の中を歩きながら夢中で書いたシャッター。乾さんは、個人のホームページに、その写真と体験を記録している。倒壊したアパート、煙におおわれる街、迫る炎。サイバー上に乾さんの記録は刻まれている。



本紙特報が貼り出される（95年1月27日 六甲台）

四十四人の追悼手記を紙面に

「神大に記憶とどめておきたい」

里田明美さん（中国新聞社）

「直感で震度六はあるな」と思いました。外に出ると、ケガをしている人もいます。電柱は倒れているで大変でした。自然科学研究科修士一年だった

「直感で震度六はあるな」と思いました。外に出ると、ケガをしている人もいます。電柱は倒れているで大変でした。自然科学研究科修士一年だった

食料品の販売を始めた生協。安否確認に追われる各学部……。次々に記事を送信した、「神大生二十人以上死亡」の貼り出し特報は、共同通信がほぼそのまま転載し、全国の新聞に載った。「同じ神大生がたくさん亡くなった。どんな人だったのか、覚えておいてほしかった」そんな思いがずっとあった。震災から一年たつて、亡くなった学生や教職員四十四人の追悼手記をまとめた。家族への電話取材は辛かった。「なんて声をかけたらよいか。聞くことによつて傷を深めるんじゃないだろうか」と葛藤もありました。何が運命を分けたのか。いつもと同じことをして助かった人と、違うことをして助かった人。特集号を発行後、遺族からお礼の手紙をもらい、少しほっとした。

「人間は忘れる動物だと思ふ。忘れないために残したかった」。故郷・広島の新報社で働く今も、亡くなった学生のお母さんとの文通が続いている。

- ### '97神戸大学十大ニュース
- 1位 1部復帰のアメフト部が昨年大学日本一の京大を破る。(九月二十一日)
 - 2位 森永製品の不売買運動を続けていた生協で、二十六年ぶりに販売を再開。(六月十日)
 - 3位 NHK連ドラ「甘辛しゃん」のロケが六甲台学舎で行われる。(九月六日)
 - 4位 近畿国立大学体育大会で男子が五種目で優勝、全体でも総合優勝を果たす。(八月)
 - 5位 アイスホッケー部が初の1部昇格を果たす。(十一月十七日)
 - 6位 電子メール用IDを使って、ねずみ講まがいのメールが学内から送られたことが発覚。(十月)
 - 7位 住吉寮、国維寮に代わる「住吉国際学生宿舎」の第一期工事としてB棟が完成。(三月二十五日)
 - 8位 国際文化学部のコンピューターネットワークにクラッカー(不正侵入者)が侵入、一時利用が制限。(十一月)
 - 9位 大学のホームページが公式化。リンクがなくなる学生団体からは不満の声も。(九月)
 - 10位 大学院に総合人間科学研究科が設置される。(四月二十五日)

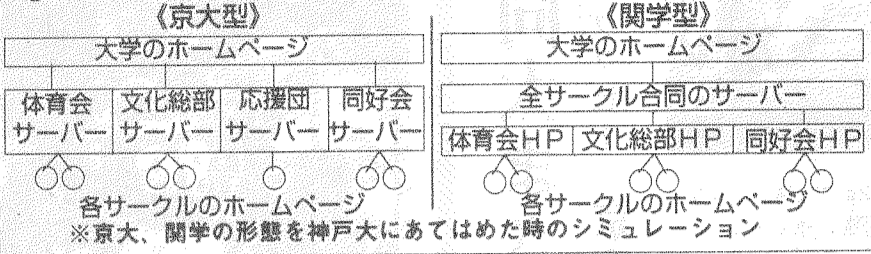
九七年神戸大十大ニュース決まる

神戸大ニュースネットの編集部が選ぶ神戸大の一九九七年の十大ニュースが決まった。王者京大を倒したアメフト部が二年連続で一位に。また「電子メールでネズミ講」「国文コンピュターにクラッカー侵入」「大学ホームページ公式化で議論」など、インターネット社会ならではの事件や議論が、秋以降に集中したのが目立つ。

サークルHP問題 新しいシステム作りが課題

京大・関学では学生団体がサーバーを運営

学生サークルのサーバー運営例(一線はリンク)



神戸大のホームページ(H.P)上の学生サークルページをどう運営するかの議論は始まったばかりだが、他大学では大学側から委託された学生団体によるサークル用サーバーの運営が昨年スタートしている。京大では、昨年、体育会

が大学側からサーバーを割り当てられ、独自に運用している。現在は体育会本部とパレオ部など四団体がこのサーバーにHPを開設している。他サークルに開設しているアメフト部など九団体ともリンクを張っている。一方関学では、去年六月に大学が学生団体のサーバーを提供。委託を受けたインターネット専門の学生サークルが運用している。このサーバー上には、交響楽団など八つの公認団体と、非公認の報道サークルやゼミ単位でもHPを開設。広告研など学外に開設する四団体ともリンク。京大、関学いずれも、大学のトップページからリンクが張られている。運用規則について大学側からの要望や取り決めは特になく、学生側の責任において運営されている。現在までにトラブルなどはないという。

影響を受けるのは二十九団体。一月一日現在で「学生生活のページ」上にHPを公開しているのは二十九団体

国際文化学部コミュニティ学部の大月一広教授の話。学生課としてはHPを開発したいのが本音だが、ルールづくりのよい案が見つからないのは問題が起きた時のために責任の所在をはっきりさせる必要がある。学生からも、要望だけでなく、具体的に解決策を示すべきだ。

ルールづくり大切な時

国際文化学部コミュニティ学部の大月一広教授の話。学生課としてはHPを開発したいのが本音だが、ルールづくりのよい案が見つからないのは問題が起きた時のために責任の所在をはっきりさせる必要がある。学生からも、要望だけでなく、具体的に解決策を示すべきだ。

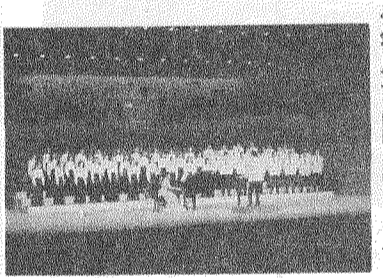
自由劇場

自由劇場が十一月三十日から十二月二日まで「ピットトラレプリカント」を公演。三日間で約三百七十人が六甲台講堂につめかけ公演を見た柴田信二さん(済・二年)は「とても良かった。これからは見たい」と語った。

映画研究部PICK'S

神戸アートビレッジセンターで十二月六、七の両日行われた神戸シネマ合同上映会に映画研究部が参加。「オレ、ボク、ワタクシ」など二作品を上映。代表者の溝口哲也さん(営・三年)は「学内でも上映会を開きたい」と意欲的。

混声合唱団エルデ



十二月八日、尼崎アルカイクホールで混声合唱団エルデが第三十四回定期演奏会を開催した。部長の柴崎信二さん(営・三年)は「今年の目標は質の向上。一つの曲に思い入れがある」と今回の定期演奏会への思いを語った。

定演フラッシュ97

年末には文化系計九団体が定期演奏会や公演を行うフラッシュを迎えた。寒い中、神戸大には一足早く花盛り。ここでダイジェストに振り返ってみよう。

定期演奏会を行った。
三ステージ構成が主流の中、「四ステージにこだわってこそグリー」。これからの伝統は続いていた」と部長の谷山秀幸さん(国文・三年)は熱く語った。

クラシックギター部
神戸市産業振興センターのホールで十二月十三日開かれたクラシックギター部の合同演奏会に神戸大が参加。部長の杉浦裕一さん(理・三)は、「これから

グリークラブ

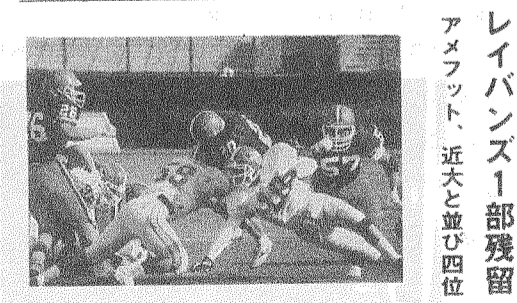
十二月九日に神戸文化大ホールで、グリークラブが

はちの巣座

十二月十三日、十四日の二日間に渡り尼崎のピッコロシアターで行われたはちの巣座卒業生公演「真夏の夜の夢」には三百人以上の人が詰め掛け、盛況のなか幕を閉じた。

交響楽団

二月十四日に神戸文化大ホールで行われ、「十びきのねずみ」など混声合唱な

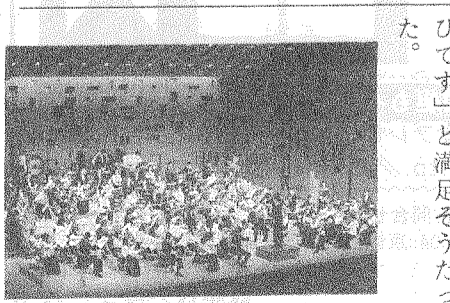


レイバンズ1部残留
アメフト、近大と並び四位
西宮スタジアムで行われた関西学生アメフトリーグ最終戦、神戸大は優勝を決めている関学と対戦し0-36と完敗。矢野ヘッドコーチは「相手はディフェンスがよかった。中島(RB)がつぶされるとウチはきつい」と振り返った。

最終順位は近大と並び四位。今季1部に昇格したレイバンズは、いきなり京大を撃破し大いにリーグを盛り上げた。



混声合唱団アポロン
混声合唱団アポロン第三十五回記念定期演奏会が十



マンドリンクラブ
マンドリンクラブの第四十二回定期演奏会が十二月二十三日に神戸文化ホールで行われ、約三百人の聴衆を集めた。一年間の集大成となるこの定演、「今回は